

大航海時代に書かれた文献から何が学べるのか

—アメリカ・日本における宣教師の活動を中心に—

ベルナット・マルティ・オロバル*

先ず、新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。本日私は「教養・語学分野」を代表として自分の研究について説明させていただきます。研究の話に入る前に簡単な自己紹介を行いたいと思います。先ず、私はスペイン人でバレンシア市出身です。バレンシア市は地中海の港町で、気候がよくてけっこう住みやすいところです。機会があれば是非行ってみてください。行くだけよりも滞在したほうがいいですね。

専門的な話に移ります。私は地元のバレンシア大学で哲学専攻を経た後に、何と早稲田に来ましたね。早稲田の文学部東洋哲学研究室で博士論文を準備して向こうで提出したのですが、研究テーマは明治仏教と西洋哲学との関係を中心に博士論文を準備しました。専門分野はここにある通り、明治仏教、明治の思想なのですが、それだけではなく16世紀、17世紀、アメリカ、フィリピン、特に日本におけるキリスト教宣教師の伝道活動の研究もしています。現在、政治経済学部でスペイン語のコーディネーターをやっている者です。

明治期に関しては、最近、「明治期日本におけるフランスのコンコルダート制度の影響—仏教公認教運動を中心に—」という研究プロジェクトが「基盤研究(C)」として日本学術振興会によって採択され、この4月1日より4年間このテーマに関する研究書を準備する予定です。これから、明治仏教を中心に政教分離、信教の自由、明治の宗教制度とヨーロッパの諸宗教制度（特にフランスのコンコルダート制度）との関係を研究する予定です。これは明治期に関する話です。それから、宣教師に関しては、三日前（3月末）が期限だった日本学術振興会の研究プロジェクトの枠で他の先生と共に『日本のキリスト教迫害期における宣

教師の「堅信」論争』（春秋社、2023年）という研究書を準備し、これが2週間前に刊行されました。わけのわからないタイトルですね。今は細かい説明は省きます。さて、本日のテーマに入りたいと思います。

先ずは「大航海時代」の定義です。分からない人はほとんどいないと思うのですが、主としては15世紀から17世紀にかけてスペイン、ポルトガルによって行われたアフリカ、アジア、アメリカへの大規模な航海を意味しています。スペイン語では「大発見時代」等の呼び方があります。これは、ある意味ではグローバル化の出発点であると言えます。大航海時代の航路は、この地図にあります。緑色の線がポルトガルの航路で、アフリカを回ってインドからアジアに進出するルートです。赤い線はスペインのルートです。この発表では、スペインが開拓したルートに焦点を当てます。このルートによって、スペインとアメリカとアジアが繋がりました。ここ、セビリアですね、スペイン南部にある川港町から出発して、ベラクルスというメキシコの東海岸にある町にたどり着き、その後、徒歩等でメキシコの西海岸にあるアカプルコまで移動して、そこからアジアに進出していました。そしてマニラまで行って、マニラから日本、中国、アジア諸国に移動していました。

次の質問ですが、「この時代の文献はどの言語で書かれたのか」。これも簡単な質問ですね。当然ながらアメリカに関しては、資料の多くはスペイン語で書かれました。それ以外の言語では、やはりラテン語は特に重要であって、またブラジル関係の資料であればポルトガル語の資料もあります。アジアの場合は、アメリカの場合と違ってやはりポルトガルがスペインに先んじてアジアに入

* 早稲田大学政治経済学術院准教授

ったので、ポルトガル語で書かれた資料が多いです。しばらくしてアジアへの航路を開拓したいと考えていたスペインは1565年にフィリピン諸島を征服した後、フィリピンを足掛かりに中国・日本とも貿易を始めましたので、スペイン語で執筆された資料も多くあります。今日はアメリカ及び日本に来たスペイン人、またはそれらの地域についてスペイン語で書かれた文献に焦点を絞ります。つまりスペイン語を学ぶと大航海時代関係のどのような文献が読めるのか、どんな研究が行えるのか、これから紹介します。

「どんな文献があるのか」という質問もありますね。どんな資料があったかという、旅行記、政府への報告書、交易に関する記録、宣教師が書いた書簡・報告書・それぞれの地域の風習に関する研究書等がありますので、それらを基にして歴史・思想史・宗教思想史・言語史・貿易史・人類学等の色々な研究を行うことができます。中でも特筆すべきなのは、征服者・旅人・殊に宣教師によって記述されたものです。人類学・思想史・宗教思想史の観点から、アメリカ先住民・日本人の風習・社会・宗教について書かれた文献を分析すると、当然ながらそれらの文化・社会に関する情報も得られますが、同時に、西洋人・キリスト教信者のものの見方自体、そして彼らがどのように異文化・異宗教を理解していたのかを分析することができます。これらの資料を通じて研究できる具体的なテーマを挙げます。テーマがたくさんある中で、三つ選びました。私自身の研究テーマそのものではなく、私が授業で扱っていて、学生が興味を持ってくれそうなテーマです。

1つ目はここに書いてある、「征服戦争の正当化、正戦論史」という研究テーマです。非常に大まかに言うと、キリスト教系の正戦論・征服の正当化の基礎となる理論は聖アウグスティヌス(354-430)等によって立てられました。後にトマス・アクィナス(1225-1274)等によって体系化され、正戦の条件が定められました。しかし、アメリカの征服が進み、それをきっかけに、スペインにおいては征服戦争に関する見直しの議論が繰り返行われました。例えば、フランシスコ・デ・ビトリア(Francisco de Vitoria, 1483/1486~1546)もこの問題を扱いました。彼は伝統的な征服正当化を否定しながらも、スペイン人(人類)は自由移

動、自由貿易、キリスト教布教の自由を持っているのだから、アメリカの先住民がそれらを妨げれば、それが正戦の理由になると述べました。ちなみに、かつては「国際法の父」と呼ばれていたビトリアですが、近年彼に対する評価が変わり、学者によっては彼はヨーロッパ帝国主義を正当化した先駆者と評されています。ひょっとしたら、どちらの評価もあっているのかもしれませんが。そうすると、国際法と帝国主義は密接に関係しているといえるのかもしれませんが。私はこの点においては専門ではないので、研究者として何か言うことはできませんが、勉強が始まったら政治学の先生方に聞いてみて下さい。

更に、ビトリア及び他のスペインの思想家の観点から、アステカ人が行っていた人身御供という神事は恐ろしい習慣であると見なされ、圧政の被害者である生贄を解放する義務が唱えられました。これは古い、現代と関係のないテーマだと思われるかもしれませんが、正戦論・征服論を盾に取った戦争は今でも行われています。具体的には、ビトリアは「神はだれに対しても隣人を大切にすることを命じており、そしてバルバロはすべて私たちの隣人である。ゆえに、だれであっても、そのような暴政や圧政から彼らを守ることができる。そしてそうした権限はとりわけ君主たちのものである。」(ビトリア・フランシスコ(著)佐々木孝(訳)『人類共通の法を求めて』(岩波書店, 1993年)104頁)と述べました。このような正戦論は現代に至るまで様々な戦争で使われています。例えば、近年のイラク戦争の場合、独裁者フセインからイラク国民を解放するためであると言って、アメリカ合衆国によって繰り返して用いられた論法です。

2つ目のテーマは、「奴隷制度史、奴隷制度正当化の歴史、人権論史」です。奴隷制度は昔から様々な文化圏に存在していますが、大航海時代が始まると大西洋奴隷貿易が展開され、人類史上最大規模の奴隷貿易が始まりました。この事象は多くの異なる観点から研究できます。例えば、貿易史、モノカルチャー経済(大量の農作物を生産し、一つの農産物に依存)の歴史(特にサトウキビ栽培)、それらの農作物の生産史、それらの農作物の値段と消費の動向等の研究分野から分析できます。またこれらのテーマと関連している食文化史の観点

からも研究が行えます。個人的には思想史に興味があり、それを研究テーマにしているので、思想史の立場から、アメリカ先住民に関する議論を分析すると、当時のヨーロッパ人の人類観が見られ、それは興味深い研究テーマになると考えます。例えば、アメリカ人のキリスト教化を実現するために、彼らを村落に集め、スペイン人の下で暮らせるという制度が誕生しました。この制度は、征服が進行するにつれ、スペインが支配していた地域で広がり、その結果、厳しい条件で鉱山で働かされたり、農作業をさせられたりしたカリブ諸島の原住民は過労で倒れたり、病気になったりしました。この制度はある意味で合法的な奴隷化に繋がったとみることができます。アメリカに行った一部の宣教師たちはこの過酷な状況を目撃し、異論を唱え始めました。そうすると、宣教師による批判をきっかけに、スペインに於いては先住民の権利を巡る道徳的、法的、神学的な論争が始まりました。例えば、スペインの征服を擁護していた神学・法学の著名な専門家、フアン・ヒネス・デ・セプールベダ (Juan Ginés de Sepúlveda, 1490-1573) は、アリストテレスの自然奴隷論を根拠にアメリカ先住民の奴隷化の正当化を試みました。一方、先住民に対する過酷な扱いを批判し、先住民は純粹であり、理想的なキリスト教信者になれると論じたバルトロメ・デ・ラス・カサス (Bartolomé de las Casas, ca. 1484-1566) もいました。

これは人権論の先駆的な理論であると言えますが、まだ普遍的な人権論ではありません。何故なら、この時代には、まだ黒人の奴隷化はほとんど問題視されず、黒人奴隷制度の長い歴史、黒人に対する偏見は依然存在し続けるからです。実は、先住民の人権を守ろうとした宣教師でも黒人奴隷の輸入・使用には異を唱えていませんでした。ここでは詳しい話は出来ませんが、当時黒人の奴隷化を問題にした人もいなくはなかったのですが、その数はほんの僅かでした。

3番目のテーマ、最後のテーマですが、「世界人類の文化、社会の順位付け」です。今までアメリカの話ばかりでしたが、日本に関する話をこれから少しします。日本で福音伝道を行った宣教師も日本の風俗・社会・宗教・言語等について学び、貴重な文献を多く残しました。もちろん、こ

れらには日本に関する重要な情報が記載されていて、日本史・日本語史・日本宗教史・日本の風俗史等を研究するための根本資料となっています。また、当時の日本・ヨーロッパの風習を比較する書物は宣教師によって書かれているため、比較文化を行うためにも示唆に富んでいる文献が多々あります。個人的には、ヨーロッパと日本のコミュニケーションの形式を比較する文章には非常に的確な記述があると考えます。

例えば、ヴァリニャーノは『日本諸事要録』(1583)において「日本人が他の人々より優秀であることは否定し得ないところである。彼等は交際において、はなはだ用意周到であり、思慮深い。ヨーロッパ人と異なり、彼等は悲歎や不平、あるいは窮状を語っても、感情に走らない。すなわち、人を訪ねた時に相手に不愉快なことを言うべきではないと心に期しているので、決して自分の苦労や不幸や悲歎を口にしない。」と分析・評価しています。(アレッサンドロ・ヴァリニャーノ (著) 松田毅一 (訳) 『日本諸事要録』(1583) (平凡社, 1983), 13頁) 更に、これらの文献には当時の西洋人の日本人観・他文化観も見られます。そして、宣教師が来日した時には、アメリカ・アジアの諸民族に対するキリスト教布教は既に始められていたので、日本人とそれぞれの民族との意義深い比較も見られます。

例えば、18世紀からヨーロッパにおいては「人種学」によってそれぞれの「人種」、「民族」が分類され、優れたヨーロッパの「白人」に対して日本人は劣った「黄色人種」に分類されました。ところが、それ以前の16・17世紀に来日した宣教師の文献の中では日本人は必ず「肌の白い国民」と紹介されています。つまり、当時既に肌の色で漠然と文明の進歩度合いが区別されていましたが、「黒人」、「茶色の国民」に対して、「進歩」していた中国人・日本人はヨーロッパ人と同じく「白人」と描写されていたのです。この前例があったにもかかわらず、幕末に入ってきた宣教師は昔の分類を踏襲せずに日本人を「黄色人」と呼んでいます。ポルトガル・スペインが初めて世界を繋ぐ航路を開拓した結果、宣教師は世界中の先住民の情報を集めることが可能になりました。その中で、世界中の文化の順位づけをし始めた宣教師は、未熟・子供のようなアメリカ先住民に対し、日本人を洗

練された民族と見做していたということが分かります。

この世界人類の文化・社会の断片的な順位づけをまとめて、体系的に紹介したのはホセ・デ・アコスタ (José de Acosta, 1540年-1600年) というアメリカで活動していたイエズス会士です。彼は、1588年の『インディアスにおける福音伝道論 (De procuranda indorum salute)』の序文で、自身の経験、他の宣教師の書籍に基づき、異教徒の諸民族を文化の発展状況によって三種類に分類しました。日本に関しては、ザビエル及びヴァリニャーノの文献が特に重要であったでしょう。

最も発展している民族として中国・日本が挙げられています。第二グループを代表する民族としてはアステカ人及びインカ人を挙げています。最後に、社会として成立していない・文化の非常に乏しい民族があって、そのグループにはほとんどのアメリカ原住民が入ると主張しました。そして、それぞれの発展状況によって宣教師は異なった扱い方・伝道方法を取る必要があると記述しました。即ち、中国人・日本人に対しては、力に訴えることは出来ず、理性のみによって改宗させなければなりません。その一方で、最も遅れた民族の場合、子供に近い存在であるから力を使用する必要性が生じる場合もあると述べました。これは18・19世紀ヨーロッパ帝国主義論と大いに類似しています。

ただし、帝国主義論は「現地住民をキリスト教に改宗させる」よりも「彼らを文明に導く」ことを目標としています。18世紀フランスの啓蒙主義者、コンドルセの『人間精神進歩史』という著作を読むと、野蛮人（つまり、文明にたどり着いていない国民）という分類項目があり、アコスタのこの分類に非常に似ています。

では結びに入ります、簡単なまとめです。今日は「大航海時代に書かれた文献から何が学べるのか」というテーマで簡単に説明しました。思想史の観点から見て、以上の研究課題に加えて、それらと密接につながっている帝国主義イデオロギーの形成、西洋の文明論の源等も研究できます。その意味でも、この時代の資料、特に宣教師によるものは非常に価値が高いといえます。そして、それらを直接読むためには、やはり外国語の習得が不可欠です。皆さん一生懸命勉強してください。ご清聴ありがとうございました。

【新入生への推薦図書】

岸野久『ザビエルと日本』(吉川弘文館, 1998)

ツヴェタン・トドロフ(著)及川馥, 大谷尚文, 菊地良夫(訳)『他者の記号学—アメリカ大陸の征服—』(法政大学出版局, 1982)。

松森奈津子『野蛮から秩序へ: インディアス問題とサラマンカ学派』(名古屋大学出版会, 2009)